

## 重度精神薄弱児への人間学的接近（第3報）

—ある盲精神薄弱者との出会い—

村上英治・後藤かをり<sup>1)</sup>

悲しまぬ気狂いはめしいよりましと吐きすて  
如何にせよとかわれに

—小森恵美子点字歌集“冬の花”より—

### はじめに

ひとりの人間がひとりの人間のところの中に、わずか5日間という短日月のうちで、いったいどれだけ入りこむことが出来るのだろうか。

愛知県心身障害者コロニーの成人収容施設、養楽荘、あおぎりの居室の一隅で、背中を丸め、タテヒザをしたまま、下うつむき気に、しかも時々見えぬ眼をあちらこちらに見すえながら、誰に向ってということなく、我と我が身にというか、世界内存在としての自分をとおしてこの世のありとあらゆる人によびかけようとするかの如く、そして一ときの休むひまなく、たてつづけにそれを常同的といってもよいひとりごとをつぶやき続ける、ひとりの盲精神薄弱児、いやもう29才にもなっている、盲精神薄弱者というべきか。それがヤスオであった。

昨年、養楽荘ではじめての実習の折、私たちの直接の対象ケースではなかったけれど、終始、こうしたヤスオの後すがたは、この世の中の哀しみを何かひとり背負っているかの如き想いで、私の心を強くとらえてはなさなかった。

実習に参加したほかの仲間が、みんなひとりひとり、自分が担当したケースを中心に、ちえは遅れたままで大人になった人たちとのとりくみを続けていたその間中、私はひまさえあればヤスオとの接触を保ち続けようとした。

しかし、その時間はあまりにも限られていた。彼の語る哀しみの生活史にも似た悲痛な叫びに耳かたむけるには、もっともっと多くの時間を、彼と過ごさねばならない、もっともっと彼と世界を分ちもたねばならない。

今年、4度目のコロニー実習に、養楽荘をふたたびそ

の実習の場所と定めた時、私の脳裡に真先にヤスオの声とその姿がまざまざと浮かびあがり、今年度の対象ケースとして誰よりも先にその名を指定していたのだった。

この一年の間にヤスオの養楽荘での生活に特に大きな変化があったとは見られない。彼は依然同じ状況で、同じ構えで叫びつづけていたに違いない。その叫びは、一体、誰に向かって、何のために発せられつづけているのだろうか。しかも、血を吐く思いにも聞えるそれらの叫びは、日々の日常的業務の繁忙の故に、養楽荘の生活状況の中ではどうしても雑音に満ちた不協和音として無視され、抑圧され、かき消されてしまうのではないか。

この声に、期間はわずが限られたものでしかなくとも、ほんとうに全身全霊をこめて聞きいることのできる人があらわれたとしたら、たとえその声の中にこもる無量の重味を十二分にはうけとめきすることはできないにしても、彼が世界内存在として歴史的、社会的に規定されながら、主体的に自己変革を求めていく一つのキッカケの場に、あるいはそれがなりえないものだろうか。

私の仲間のひとりの、それへの挑戦を、私は私なりに期待したかった。かかわり体験を深めていくことの可能性の吟味という従来の線に沿っての、この年もまた、ただそれだけを目途としての私どものコロニーでの教育研究実習の課題に、これをひとつの症例研究として提起したいとの思いが、私の中にこの時強くうずいたのである。ひとりの人間がひとりの人間の、その全身全霊こめての訴えを、どれほどうけとめうるものかの一つの試みですら、それはある。

私どもの仲間のひとり、後藤（旧姓田村）かをりが、私自身のこの種の意図にそってかかわりつづけようとした、これは、その5日間のとりくみ終えて、その夜ごと夜ごとに記したナマの体験の記録である。従来ふまえて

1) 名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻修士課程学生（旧姓田村）

きた人間学的接近の一つの具体的事例として、あえてここで報告する所以である。（村上英治）

## Ⅰ かかわりの体験

### —1. それなら聞くな

＜出会い＞ということ、それが大切であること、確かにそう思う。けれど、それは決してはじめから何年越しかの友達のような親しきをつくることではなく、そのきっかけをつくること、互いの緊張の中で、それでもその緊張がどこかしらほぐれていって仲よくなれそうな、そんな気持ちになってくる、それが私にとって最高のもののような、そんな気がする。一方が他方の心に無法に侵入してゆくところには、決して自由なつながりは生まれない。

このことに気づかせてくれたのはヤスオ。ヤスオは私のいけぬきを見事に見抜いた。そして、それを表現して私に教えてくれた。

私は気楽に、むしろ図々しく、ヤスオの前に現われた。そして、突然、「こんにちわ」とあいさつをした。目の見えない彼にとって、それはどんな気持ちだったろう。得体の知れぬ女の声が突然聞こえてきて、前ぶれもなく腕に触れた……それなのに私は自己紹介もせず、まるで彼の前にいるのは当然であるかのように。それでも彼は、私の期待に答えて私の手の存在を確かめ、彼の苦しみの物語を語り始めた。そして……私は残酷にも彼の物語りがよく聞こえなかったことを理由に、心ない、ありきたりの発言をしてしまったのだ。それが、彼の深い心的トラウマをつつくことになったのか、彼は即座に私の手を払いのけようとした。敏感に、けれど心を傷つけられた者の反応としてごく当たり前。私にとってそれは、自責、自己嫌悪。しかも、それをヤスオに伝えることもできず、ただすわっているだけ……ああ。

彼は口をつぐんだ。周囲の雰囲気をもじつと身体全体で感じようとしているように。そして、またしばらくして周囲が落ち着いてくると語り出す。私は今のことで緊張して、汗をかいて、必死に彼の話に耳を傾ける。彼はしゃべる、私はあいづちを打つ。彼は一心に話す。誰かが一心に聞くことを求めている。

私は聞いているつもりだった。けれど仲間みんなは出ていって、私ひとり残されそうになる。そこで、「今日はもう帰る、今度また来るから、その時お話しして。」と立ち去ろうとした。私としては、さも当たり前そうに。けれど、彼にとって、このことはまたすごく大きな裏切り

だったんだろう。うらめしそうにじっと見て、（何か心を見透かされているような気がした）「ボクガ話シ出スト、セツカク話シ出スト、ミンナソウイッテ。ソレナラ聞クナ」という意味のことを、また一心に言う。私はまた、自分の勝手にハッとする。一度ならずも二度までも。「ごめん、でも、もう行かなくっちゃ。」ヤスオは、私の手を顔をひっかく。「ゴメンナサイ、ナンテ言ッテモラッテモショウガナイ。モウオマエニハ話サン」と言っている。私はあやまる、そして再度の訪れを強く強く約束する。このままでは立ち去れない。けれど何をしたいのか解らぬ。どうしようもない気持ちを抱いて。彼はまた話し出す。また聞く。だが結局、「またね」と言ったまま、出て来てしまわざるを得なかった私。

どうしようもない気持ちは、今も続く。私自身に対する嫌悪感。真剣さを忘れていた態度。彼のやり場のない怒り、訴えに見合った真剣さが欠けていたこと。彼は自らの心の傷をしか語らない。悲しいことだけをしゃべる。悲しいことをしゃべることは、彼にとって慰めなのだろうか。それとも、話すことによって悲しみは一層増すのだろうか。いずれにしろ、彼は、語らずにはいられないのだ。ああして、日がな一日語ることが、彼の表現、彼の精一杯の生きざまなのだ。この上なく精一杯の。真剣なんだ。当り前のこと、わかっていた筈の、つもりのこと。彼らがこの上なく真剣に生きていること。こちらが真剣でない限り、この上なく真剣でない限り、つながりなんて持てやしない。また、彼にとっては、こうした私との出会いが、いつもそうであろう、チラッと話を聞いてくれ、そしてまたそれだけでサラリと去っていく人たちとの出会いが、彼のトラウマをまた一段と増してしまふことになるのではないかということ。私自身にとって、非常に身勝手ではあるが、実際の実習の前にこうして、今日彼に教えてもらったことの有難さ。それとちょうど同じだけの、彼にとっての迷惑さ。

（実習に先立ってコロニー見学の日）

### —2. オレひとりでウチに帰る

先日の見学でヤスオに出会い、ある意味で打ちのめされた私。実習最初の今日、ヤスオに会うに先立って、積極的な、ヤスオと、という気持ちと、ヤスオに拒否されないだろうか、うまく接触できるだろうか、ヤスオとの接触の長時間の緊張に自分自身が耐えられるだろうかという、しりぞいていく方向の気持ちとが交錯していた。だから、食堂でヤスオを捜していた時も、部屋の隅にやっと見つけて、側で話しかける時も、オズオズと、オズオズと、であった。けれども、目の見えないヤスオに、私

がヤスオに会いに来たこと、今隣りにいることを明確に知らせること、名のることが、まず私の義務、人とつき合おうとするに当たっての当然の義務だ、礼儀だと考え、自己紹介をした、今度はずっと5日間一緒に居られることを含めて。ヤスオは耳を澄まし、私という奇異な存在を容認するか、否定するか（否定することは、黙殺することだろう）を決定するように、食事時も休めぬツブヤキを一瞬止めた。そして、彼はまた、相変わらずしゃべり続けた、聞く人を意識することなしに。

食事が終わり、今度は本当にヤスオと二人きりになった。ヤスオは、やはり、ひとりブツブツ言っていた。何を言っているのだろう、聞きとりにくい。それでも、やっと、観光バスに乗って、個人タクシーに乗って、いつ家に帰れるか、帰れるかと尋ね続けていることがわかった。私は聞きとるのが精一杯。あいづちを打ちつつ、聞き返しつつ、（ヤスオはじれったそうに口の中で繰り返す）ヤスオの気持ちを返そうと努力しつつ。彼の言葉は、ヤスオひとりの世界のひとり言にすぎない。しかしそれに、彼のありったけの気持ちがあらわれていることには間違いがない。けれど、この段階では彼は相変わらず、私に関係なく、彼ひとりの世界にいる。

私の身体は、ぎこちなくヤスオに触れるだけ、存在を示す為に。けれど、彼がふと、その話の間にはさんだ短い鼻歌、それは、聞き覚えのありそうな、なきそうな歌。それを、私は、その瞬間、知っているような気がして口ずさんだ、（けれど、本当は知らないから）あとは作って。ヤスオは聞き入った、じっと耳を澄まして。そして、次第に、次第に、彼の目に涙があふれてきた。「テレビで聞いた、家でテレビで聞いた。ボク、家に帰りたくなった。家に帰りたい」と、彼は、はじめて、私に対しての言葉を。二人の間に関係が生まれた。ヤスオは、だんだん私の方に身を寄せてきた。私にもたれかかり、手を私のひざの上に置き、歌に合わせて、身体をゆすり、頭をゆらせながら。

散歩から帰っても、ヤスオはやっぱり同じことを繰り返していた。「ボクはいつうちに帰るのか。28日に帰れるか。帰れるか、帰れるか。28日にお母ちゃんは来るか。」

私は答えられない。ヤスオがいつ帰れるか知らないから。ヤスオの両親が一体面会に来たりするのか知らないから。彼は尋ねる。私はわからないと答える。ヤスオは言う。「わからん、わからん、来るのか来んのか……わかるかわからんか……今に見とれ……。」

私は指導員さんに聞きに行った。両親は来るのかどうか。聞いて明確に答えなかった、彼の精一杯の気持ちをあやふやにしなくなかったから。そして、私は聞いたままに答えた。ヤスオが帰れるのはお正月で、お母ちゃんが来るのは、9月9日であると。彼は繰り返す、繰り返す、「お正月、お正月。」と言い、それでもやっぱり同じ問いを繰り返す、「オレひとりでウチに帰る、バスで行く、個人タクシーで行く、名鉄に乗って」と言い続けた。けれど、次第に、それは、帰って何をするか、誰と一緒に寝るか、などの話になっていった。そして、彼の顔は、だんだん上を向き、宙を仰ぐようになり、そして、彼の目に、頬に、ホホエミが浮かんだ。ホホエミが。そして、彼の手は私の顔に触れ、あちこち、あちこち、ナデル、ナデル。彼が私の存在を自分から確かめている。ホホエミながら。そしてまた部屋を出て、同じ会話を繰り返しながら、彼が跳びはねた、二度、三度、ホホエミで。

私は、この実習期間のうちのひとつの目標として、ヤスオにホホエミを見出すことを願っていた。世界に向かって開かれた、積極的にかかわってこうとする、そんなホホエミを。今日のヤスオのホホエミはそれなのか、やはり、ヤスオひとりの世界の中でのホホエミなのか、夢なのか、憧れなのか。彼は、どんな生活をして来たのだろう。ヤスオのお父さん、お母さんはどんな人なのだろう。ヤスオはどんなにお父さん、お母さん、弟、山中のケイコちゃんを愛しているのだろう。「家に帰ってお父ちゃん、お母ちゃんと一緒に寝たい。仕事して、残業して、お金をもうけて、家にいたい。」そう叫ぶ彼を、家族はどう受けとめているだろう。私はどう受けとめているのだろう。（第1日目に）

### —3. ヤスオのパンチ

朝礼から帰って、朝のあいさつ、シーツ交換の時も、彼の顔は明かるかった。上を向いていることが多かった、ホホエミがあった。話の内容は、大声で話すこと、その為にみんなからうるさいと叱られることであった。ヤスオは確かに大声でしゃべり中となる。けれど、ヤスオがどうして大きな声を出すかと言えば、それは、保母さんの口まねである。保母さんが、「誰々、何々しなさい」と言うのを、彼の耳はそれこそ鋭敏にとらえ、それを本当に大きな声で言うのである。けれど、彼の怒るような大声は、彼に、彼の大声の結果がどうなったか、すなわち、誰々がどうしたかを説明することで解決する。彼の怒りのこもった声、顔は晴れやかになる。彼もはじめは、大声のために叱られることを話していたが、そうし

て周囲の状況を説明しているうちに、叫ぶと声が枯れ、疲れることの話となり、私の言った、ヤスオの声が保母さんのお手伝いをしているとの位置づけに喜びを感じたようだった。シーツ交換の時間、彼に「やろう」と言うが、彼は「いや、やらん」と拒否する。そして、私の手をとって、笑顔で自分の唇にトントンときわらせ、私に、「おまえ、渡辺先生か誰や」と尋ね、私が、「あたし？」と、私の事かと念を押すと、「おまえ」と言う。私は「タ・ム・ラ・カ・ヲ・リ」と答える。まさに、ヤスオとカヲリの関係の端緒ができるかと思えて、いい感じの時間だった。

けれど、それからの彼は悲愴であった。昨日の家に帰る話、帰って……する話は、「帰りたい」という強い意志の言葉に収斂されていった。「帰りたいあァい、お家に帰りたいあァい、一宮へ行きたあァい」と声を枯らして、悲痛な叫び声をあげる。私に向かって、私の姿を手を伸ばし感じながら。私は途方にくれた、というより、もうどうしようもなく悲しく、ヤスオと一緒に泣きたい思いであった。ヤスオは、そうして、帰りたいことに埋もれていった。私は、本当に帰してやりたかった。どうにかする方法はないかと考えた。係長さんにヤスオの家庭の状況を聞いてみようか、ご両親に連絡をとろうか、などなど、けれどももちろん、それにも踏み出せない。所詮、私が出る幕ではなさそうだ。

昼食後、私の心は、私の現実的な力のなさに打ちひしがれ、彼の叫びの悲痛さに動揺し、彼の常同的ともいえるいつもの質問、「ヤッちゃんはいつ帰れるの」に返答を失っていた。彼の、帰りたい、帰ることに対する固着はいよいよ強く、私の葛藤は深く深く、1時間半にわたるトイレでのつき合いの中でも、答えようのない私に、受けとめられなさから来るのだろう彼の不安は、一層つっていった。手をつながなくなり、遠ざけよう、遠ざかろうとする気配がみえた。

そして、おやつ時間、彼の不安は爆発した。私の顔を数度強く打った。みごとなパンチ。痛かった、顔がゆがむ程。うるたえた。生まれて誰からも、こんな手ひどく打たれたことはない。悲しかった、ただひたすらに悲しかった。昨日の、今朝のホホエミは、私に対するホホエミは、問いかけは、何だったんだろう。私は、やはり際限なく続く、彼の「いつ帰れる……」に答えられなかった。打たれた痛さは、内にまでしみ渡り、近よれなかった。けれど、彼のホホエミはうそではなかったし、よい意味であれ悪い意味であれ、私は彼に何らかの印象を

与えている筈だ。ここで、彼との関係が、そんな彼との関係が崩れること、無になることには耐えられなかった。オズオズと、また、図々しくも、私はヤスオに近づいた。村上先生の助けを借りて。ヤスオは、自分にあんなにも打たれ、なおかつ近づいていく私をどう思っただろう。うるさい、うるさい人間だと思っただろうか。

叫びつかれ、力を出しきったヤスオは、段々落ちていっていった。村上先生に、そしてまた私に、話しかけてきた。ヤスオは、先生と私にもたれかかり、ひとり思い出し笑いをする、そんな状態になっていった。それから夕食まで、ヤスオは私にもたれかかり、黙って、あるいは口の中で、「家に帰る、お正月に……」と繰り返しつつ、私の歌を聞いていた。歌っていると、口に耳をつける。何の歌や」と聞く。ああ、私はヤスオとどういう関係なのだろうか。

食事後、打たれたことで反対に、私の心は、穏やかに気楽になっていた。先日の見学の時の拒否のはしりともいいたしぐさ、それを私は、昨日から、いつか出やしないかと恐れていた。それが現実となったからには、もう恐れるものは何もない。むしろゆったりとヤスオと居られる私になっていた。（第2日目に）

#### 4. 接することと離れることと

「おはよう」のあいさつに、ヤスオは「うん」と言い、やはり「ヤッちゃんいつ帰れるか」という話をはじめた。私は、それに答えるのに、お正月ということとし、むしろ、ヤスオの話の中から、多分ヤスオがいい感情を持っているだろうもの、たとえば、学校の話、タツミヤ先生（どこの先生かは判らない）の話、テレビ番組の話、好きな人の話を聞かせてくれるようにヤスオに言うようにした。するとヤスオは、こちらが軽く言っている時には、ヤスオひとりの世界の話が続けるのだけれど、「ねえ、ヤッちゃん」と念を押し、ひとつひとつ言い聞かせるように言うと、ひとつひとつ肯き、話そうとする。そして、しばらくすると、また、私にびったりとよりそってしなだれかかってくる。その表情は、昨日のあの悲惨なものではなくって、どこか穏やかで、鼻の頭のシワもなく、終始ホホエンでいた。そして、「ヤッちゃん、歌好きでしょ。」「うん。」「歌うたおうか。」「うん」と会話を続けていると、また、私が自分の好きな歌を歌っていると、彼はもっともっとしなだれかかり、自分の耳を私の口に近づけてくるのであった。また、「ヤッちゃんの好きな歌、歌って」に、時々「アアア」とメロディのきれいな歌を歌うのであった。私とそのヤッちゃんの歌を真似すると、彼はこぼれんばかりの笑顔で

みせる。その間に、やはり「一宮へ行きたい」など言うけれど、言いつつ笑っている。ホホエミ、「ククク」との笑いの中で、「一宮へ行きたい」と繰り返すのである。

こうして持続するヤスオの穏やかさ、明かるさと、昨日のあの興奮と、どうつながっているのであろうか。

昼食時の会話。「今日のおかず何。」「カツ。」「カツフライ?」「小さく切って。大きいのはいかん。」「ヤッチャン何々好き?」「ウン好き。」「パンない?」「うん、今日はない。」「残念。」「お茶飲む?」「うんお茶入れて」などなど。普通に普通に会話がはずむ。楽しい。

夕食、またおかずの話、まったくよく通じる。彼が話しかける。「何々して。」「何々きらい。」「私もまた話しかける。

食事から帰ってから、今日は散歩にと思うが、雨でダメ。食堂から帰って来る時、レコードを聞く話をしたので、「レコードを聞きに行こう」とカセットの側へ行く。チェリッシュの一連の歌。「ひまわりの小径」になると、彼は全身で楽しさを表現する。顔はこぼれんばかりに笑い、腕を上手にふり、身体を上下に揺さぶる。そして、「ヤッチャンこの歌好き?」に力強く「うん」とうなづき、「またかけようか」にも「うん」とうなづき、彼は歌う。タンタンと、あのロックっぽいリズムを口ずさみ、前奏から、鼻歌でメロディ、音程も確かに、本当に、彼が歌を、楽しんで歌っている。私はもうそれこそうれしくなって、何度も何度も彼と歌い、彼の歌を聞く。彼は、終わると「もう1回」とまた言う。ああ、すばらしい時間。  
(第3日目に)

午前中は散歩。「僕散歩いや、ここにいる」と言うけれども、保母さんと外へ出す。「みんな行くから」と言うで一応納得。靴をはき、外へ。ずっと手をひいている。緊張した険しい表情は変わらず。「僕階段いや、おんぶして」とかなんとか、甘えてくるのを受け容れつつ、遅れでもかまわないやと後から歩いていたら、保母さんがもどって来られて、グングンひっぱっていく。ほとんど走らんばかりのスピードで。仕方なく私も歩くけれども、心の中で、どうしてこう急がなければいけないのか、これじゃ散歩の散の意味がないじゃないか。せっかく歩くことの楽しさをヤッチャンと感じたいと思ったのに、と思う。この時、保母さんが、「ヤスオ、早く歩き、ヤスオは歩けるんだから、パッパッパー」と言った途端、「何がパッパッパーや」とヤスオが保母さんをピシリ。これまでのヤスオと私との会話の中で、やはり全面的には信じられなかったところのあるヤスオの反応性に、ま

ったくの信頼を持ったのであった。

お風呂までの時間、佳孝、そして時々宇殿さんとヤスオとで過ごす。お風呂の話なんかをする。「宇殿くんだよ」と言う。「うん」と言い、「ヤッチャン、宇殿くん好き?」と聞くと「うん、好き」と答えるヤスオ。こうして宇殿くんたち、友達との関係ができていったらいいと思う。そう開かれていきつつあることが無性にうれしかった。ヤスオが養楽荘で楽しく過ごせるようになることが必要なのではないか。そのためには人間がいる。ヤスオとつきあう人間がいるんだ。そう思う。

お風呂はつきあわず、着脱の世話。ヤスオは下着だけを着ると、「便所」といって、便所へ。しばらくやっぱり例の話をしていたが、そのうち静かになる。行って、「帰ろう」と言うが、動かない。ずっと黙っている。「先生も一緒にいよう」と言う、「僕先生といたくない。」「——何と強烈な言葉!」けれども、「うん、そしたらむこうで待ってるね」と案外素直に言えた私。ヤスオのひとりの世界に入れなさを感じ、しかも、それもいいじゃないか、トイレの中だもんという気もして。誰だってひとりの時間が欲しいし、トイレの中にまでついてきて欲しくないだろうという気になって、他の子と、私は遊んでいた。すると5分ほどして、宇殿くんがヤスオを連れて出て来る。ヤスオはまたブツブツと言っていたけれど。私ではない友達の力の大きいことをひしひしと感じた。

ヤスオと私との関係、切っても切れない関係ができたのか、できないのか。不安。けれど、いつも一緒にいることだけ、ベタッとしていることだけが、よい関係ではない。ヤスオが私を拒否し、また受け容れる、そういう両方の時があってもいいんじゃないか、そう思うのである。  
(第4日目に)

## —5. ヤスオとカヨリがここにいる

朝、珍しく、廊下に立って、けれどやっぱり何やらブツブツ言っているヤスオを見つけた。「おはよう」と言う、「うん。」そして話し続ける。表情はそんなには堅くない。常同言語の中に、「先生」「先生」という呼びかけが目立つ。私の中にはまったく緊張(動けなくする緊張)がない。ヤスオと安心して一緒にいられる。ヤスオもリラックスしているのがわかる。「朝礼だよ」と言う。「うん」と素直に立ち上がり、「朝礼行く」と言いながら、ブレイルームへ。手のとり方も、何か違うような、安心しきった感じがする。こちらの一方的な感じだろうか。歩いている間も、「ブレイルームの入り口だよ」とか、「もう2~3歩歩いてすわろう」とか

が、よどみなくつながっていく。

朝礼の間は離れていたけれども、他の子との関係で、体操の終わったころ、ヤスオの側に。宇殿くんが、ヤスオをこちらに向かせてくれる。「ヤッちゃん」と話しかけると、手を伸ばし、顔を触れまわし、「先生。」「先生」と笑いながら。顔をあげ、一心に見るように開かぬまぶたをあけて。ああ、この子の中に私が積極的な意味を持つ人間として位置づけられているんだなど、ヤスオの私に対する親しみが、うれしく、うれしく、伝わってくる。

レコードがかかっている。時々上体を動かす。そして、しばしば、自分で歌いだす。「よさこい節」「雨ふれふれ」などなど。私のわからぬ、いろんなメロディーを繰り返して歌う。私も歌う。楽しい。突然、彼は立ち上がり、床をびよんびよんはねだした。私もはねる。ボールをつきながら。これまでも1日1～2回、ヤスオがはねる時があった。けれど、私はとべなかった。とぼうと身構えるとヤスオがやめた。ほんの2～3回はねるだけだから。けれど、今日は、私もはねた。ヤスオがやめてもはねた。するとヤスオがまたはねた。私のはねる。ヤスオがはねる。何度も何度も。一しょにはねるヤスオとカヲリ。ヤスオとカヲリがここにいる。

（実習最後の日に）

## Ⅱ まとめと考察

### 1. 5日間のとりくみのまとめ

最初、私の心の中には、ヤスオに対して難しい人、とつきにくい人というとらえがあった。それでも、ヤスオには私が見えないのだからと思い、私の存在を知らせるべく私としては精一杯誠実にヤスオに接近したつもりである。けれどそのやり方は、実際的にはたしかにオドオドとしたものであったと思われる。私の心には、ヤスオと結びつきを持とうという気持ちよりも、それは当然のこととして、まずヤスオの話のよい聞き役になるうという、受け身的な役割に自分を位置づける傾向が少なからずあった。それでも、時間がたつにつれてヤスオは、私に対して、話すことが次第に多くなっていった。私の存在を確かめるような行為も見られた。そして、ヤスオの孤独の世界の中で、また私との関係の中でも、ほんの少しだが笑顔の片りんが見られるようになった。

2日目、ヤスオの話の聞き役である私は、ヤスオの話に、そしてヤスオの中に、吸い込まれていった。その悲愴さに泣き、私自身の心を見失ってしまった。こうしてヤスオの心と同じになろうとして、またときにはなった

つもりの私は、もはやヤスオとの関係をつくるべき人間ではなくて、ヤスオの中にのめりこんだ人間となった。ヤスオと物理的にくっついていなければ不安である私であった。こんな中で、人間と人間との間にいわゆる関係のできよう筈がない。ヤスオと同じく答えを失った私は、ヤスオと同じように不安定になり、不安定なヤスオをますます不安定にした。そして強烈なパンチ。生まれてはじめて人からあんなにまで心をこめてなぐられた私。そこで頭から水をかぶせられたようになった私は、このベタリしたのめりこみから一たん離れ、私がヤスオにとってどんな人間かということ、自分自身に問いかける余裕をもつようになれた。その時すぐには答えはでてこなかったけれども、私の気持ちが、ヤスオとつながりたいというところにあることだけは認められたのではないか。それはもはや単なる聞き手としての私ではなくて、まさに聞くことも遊ぶことも、すべてを含んだ「私」としてであった。そうして、なぐられてもなぐられてもまた近づく私を、ヤスオは図々しいと思うだろうと思いつつ、また接触を求めていった。この日は動揺の日であり、関係の新しい出発の夕であった。

3日目には、ヤスオの明るい世界を2人で散策し、楽しんだ。「先生」と何度も呼びかけるヤスオ、応える私。一しょに歌い、そのことを喜び、関係が深まっていた。昨日の「ヤスオにとって私は……」の間はなお消えなかったし、ヤスオと私が、昨日のような情緒の不安定さを越えて結びついているとは決して思えなかったが、ヤスオの悲愴な訴え以外の明るい世界の存在がうれしかったし、そんな苦悩を持ちつつ明るさを失わぬ人間の強さに感動もし、また明るい世界の中に共にいられることがうれしかった。

4日目は、トイレでヤスオが私を拒否し、私が動揺しつつ、けれども自分でも意外なほど気楽にヤスオから離れることができた日である。私の心の底には、昨日の体験から、ヤスオからまったく拒否されるというようなことはないという確信があり、ヤスオの的確な反応性を知っていた。また、私の心の中には、トイレの中まで図々しく侵入する私には疑問が出てきていたし、人間、四六時中誰かが側にいることが耐えられないことであることは、自分自身の体験からも分っていた。このような想いから私はすんなりとヤスオから離れることができたのではなかろうか。トイレから出てきたヤスオは、ふたたび私に呼びかけ、顔をまさぐり合う関係を保ち続けることができた。この関係は、もはや私のつくった関係ではない。まさしくヤスオと私が築いた関係である。ヤスオが選り出したとも言えると思う。私の心には次第に私がヤ

スオと居て楽しいし、ヤスオも私と居て楽しい時を過ごしているだろうという気持ち、ヤスオに対する信頼感が生まれ、話を聞こうと構えることもなく、分離不安を起こすこともなくなっていた。

5日目は、まったくの信頼関係の中にヤスオと過ごすことができた。ヤスオが私を呼び求めていることがわかり、私もヤスオに呼びかけ……。私はヤスオと接してよかったという気持ちにひたされていた。だが一面、忙しきにとりまぎれて、別れの際の、ヤスオと私の感情を深く追えなかったことには心を残しながらも、コロニーに別れを告げた私だった。

## 2. 体験をとおしての考察

### 1) 関係は相互の関係として成り立つこと

5日間のヤスオと私との関係を考えると、当り前のことなのだろうが、決して関係というものが、ひとり、片方によって一方的に作られるのではなく、両者の相互の接触・選択によって築き上げられていくものであることを痛感するのである。

最初2人の関係は一方的であった。一人相撲の取り組みであった。勝手に私がヤスオの話を聞きたいと接近する。ヤスオの気分にはおかまいなしに。こうした相手の凶々しさをヤスオはどう感じただろうか。ヤスオの世界にズケズケ・ツカツカと侵入する人間。それがのめりこみであると思う。二日目の私である。

のめりこんだところには関係は生まれえない。ただ一体となりたいのみ思う人間に対して、相手には関係をつくる余地がない。しかも人間、他人と一体には絶対になり得るものではない。だから関係はできないのだ。私はヤスオの賢明な拒否によって、のめりこみから脱することができた。そして、私が何よりも一人の独立した、自分を見失わない人間として存在しなければ、他のどんな人とも関係をつくることができないということ、このとき知ったように思う。ヤスオとは、こうした独立した二人、という自覚と、数多い接触から生まれた信頼によって、離れてもいられる関係ができたと思うのである。離れていることも関係のうちであるということを実感として知りえたといえる。

このはじめの一方的な取り組みから、私の場合、相互的な関係を築くことに発展した。それがどんな要因からであり、また関係のでき得ないことがどんな要因からであるかは、今の私にはまだ明確でない。けれど私たちは、多くの人と関係を結ぶ際、そのすべてが、ただひとりの人、たとえば乳児にとっての母親のような、そんな人になろうというのではないと思う。いかなる関係であ

れ、両者によって主体的に築かれる関係を求めているのではないだろうか。虫の好かぬ人間は、誰にでもどこにでもたしかにいる。けれども、そういう人たちとも、憎み合うところに、人間と人間とのまじわりの意味があると思うのである。こうしてささやかながら私自身の体験をとおして、人間には、新しい関係を新しく結ぶ可能性、余地が限りなくあることを、ここで学んだと思う。

### 2) 発達とは人間関係の中ですすめられること

人間が発達・成長していくのに、他人との触れ合いが不可欠であるのはいうまでもない。人は、他人との関係の中で、それがまさしく自分とは異なった人間であることからおこるぶつかり合い、ゆさぶりかけの中で感じ、考え、自分のあり様を変化させてゆくものに違いない。人間のいない、いかなれば人間と人間との関係をもてないようなところでは、人間は発達し得ないし、人間といえる中では発達せずにはいられないのが人間存在である。人間が発達していく力となるものは、人間の自発的かつ主体的な動き、大きく言えば世界相手の呼びかけに対する受けとめではないだろうか。はじめは自信のない自分の動きが、次第に他人に受けとめられ、それに励まされて人間は次のさらなる活動をおこす。そうして発達していくのではないだろうか。自らさらなる活動を志向していくことのうちに。そうしたことを考える時、ヤスオの場合、養楽荘の中、いや家庭においてでも、ヤスオのあの真剣な訴えをこめた呼びかけに対して、それに見合うほど真剣に応える人間がいるだろうか。呼びかけに対して答えられないことほど、空しい気持ちはない。ヤスオが、今の食べて、寝て、排泄して、しゃべることよりほかにほとんど自らは何もしない日々のあり様から、自発的かつ主体的な、もっと種々の動きを期待するには、ヤスオのあの哀しいひとりしゃべりの奥に潜在する、明るい動きの片鱗を大切に受けとめ、ヤスオに返していくことが必要なのではないだろうか。5日間でもヤスオが、屋外で石や草に、屋内でボールや歌に、ほんのわずかではあるけれども開かれていた場面、そんなときのヤスオの動きはそれなりにすばらしいものであるように私には思われる。ヤスオがヤスオとして発達する為には、この小さな芽を育てていかなければならないのではないかと思うのである。

### 3) 5日間のとりくみということ

5日間で、ヤスオと私との間には、ある程度暖かい相互的なつながりができたと思われる。しかし、その関係が持続しないということはどういうことなのだろうか。

ヤスオはこれから前述のように、基本的に安定できる人間関係の中で動き、発達していくことが期待されると思われる。そのヤスオの、この先長い年月の生きざまの中で、私はいったい何をしたことになるのだろうか。私はやはり「5日間」ということにこだわりを、またある意味で罪悪感を抱かざるを得ないのである。これ以上続けていくことは私にはできないとは分っていつつ。また5日間であったからこそ、あれほど心をこめて接していかれたのだろうとも分っていつつ。ヤスオが5日間をどう受けとめたかわからないから不安である。私が何をしたことかわからないから不安である。ヤスオは私との接触の中で人間に対する構えを変えてゆくことができるだろうか。人間って満更捨てたものじゃないぞと。あるいはせっかくなにか仲よくなりかけたのに、そのまま去っていった私の故に、彼の人間に対する不信感がますます強くなることになりはしなかっただろうか。私との体験が本当の意味での至高体験たりえただろうか。これらさまさまの問いかけを我が身に改めて発しながら、なおこうした体験そのものは彼の内的成長にきわめて重要な意味をもつものと信ずるのである。

#### 4) 養楽荘で生きつづけること

ヤスオは周囲からの真剣なかかわりがあれば、きっと心を開き、彼自身の世界をもっともっと広げていくに違いない。しかし、そうして養楽荘という状況の中で、人に心を開いて発達しつづけるということは一体どういうことなのだろうか。養楽荘の中で生き生きと生活すればそれでいいのだろうか。多様な障害を持つ彼らは、世界に開かれていく力、世界を受け入れていく力という点では、ある意味で弱い。けれども彼らはともかく発達しつづけているのである。人間である限り発達せずにはいられない。それなら彼らには、そのように人間である限り、当然享受すべき発達の条件・環境が整っているといえるだろうか。それは疑問である。まず養楽荘における日常の繁雑さの故に、彼らがないがしろにされてしまっていることも決して少なくない。また彼らが示す自発性・主体性のかげら、発達のかげらを受け入れてくれる目がない、心がない。さらに今一つ、彼らの生き場所が養楽荘という空間に限られてしまっていることによって。たとえ生き生きと養楽荘の中で生活することができたとして、そこだけで満足して生きていくということでもいいといえるのだろうか。それではたして彼らの人間としての成長の場が尊重されたといえるのだろうか。やはり、精神的なものの広がり、深まりにおいて、養楽荘という状況の中で生きるということ、そのことにどうし

てもこだわりを持たざるをえない。今まだ養楽荘は若いけれど、これから先もう何年彼らはあそこにいつづけることになるのであろうか。もっともっと発展の場が拓げられなくてはならないと心から思う。

#### おわりに

これはまさしく、ただ、ある一人の盲精神薄弱者との出会いに始まる短期間のとりくみの報告にほかならない。5日間、このヤスオと、どのように構え、どのように接し、どのように感じつづけてきたか、かかわり手の側からのそうした一方的な報告に終始する。それが、相互の関係として内的な成長発達を志向しつつ、展開していくものなのか否か、それ自体にはきわめて多くの疑問がある。しかし、これがともかくこのケースとその期間だけでも、全霊こめてぶつかっていかうとした療育担当者のナマの体験の記録そのものであることに間違いはない。5日間のとりくみを終えて、それこそガックリと虚脱したままのカヨリがいる。そして5日間のつき合われの中で、ヤスオ自身がどう感じ、どう成長したかの明証はない。しかし、私どもは、考察の中でも後藤自身がふれているように、ヤスオが今までかつて出会うこともなかったであろうような、この種のかかわり手の出現の中で、何か自分をほんとうにみつめてくれる人、自分の声に耳傾けて聞き入ってくれる人、その叫びを心をこめてうけとめようとしてくれる人がいたことを、見えない眼ながらも見えだめようとしていたことだけは、間違いのないと思われる。

タ・ム・ラ・カ・ヨ・リ、この奇妙な女性は、養楽荘での日常の生活状況の中で、彼のまわりに常に起居して、彼を世話してくれる保母さんたちとは、まったく異質の存在として、あるとき忽然と彼の前にあらわれ、あるときまた忽然と彼の前から消え去っていった。その人自身のあらわれ方は、彼にとって予期されないものであっただけに、ある意味では迷惑至極のものであったかもしれない。

しかし、オレの一生をとおして、誰がこんなに真剣に、オレの叫びを心かたむけて聞いてくれたのだろうか、少くとも聞こうと耳傾けてくれたのだろうか。オレのパンチに涙を流して耐えながら、なおも執ようにオレに近づきつづけるカヨリがいる。オレがとびあがるとき、一しよになってとびはねてくれるカヨリがいる。見えない眼で、見定めることかなわぬ代りに、せい一ぱい心で叫ぶ、オレの声を心をこめて聞き入ろうとするカヨリがいる。

ヤスオの心にそんな思いが去来する。養楽荘という状



況の中でのみならず、たとえ家庭に帰ったとしても、悲痛な彼の叫びはむなしくコダマして虚空にはねかえって行くのみであり、誰もそのコダマに相呼応してこたえてくれないことを、彼自身、知りつくしているだけに、こうしたうけとめ手の存在は、また出現は、彼にとって何よりもオドロキであったに違いない。

ヤスオにおける魂への道に、カヨリがどれだけ分けいることができたか否か、それはいまだに定かではない。しかし、ともかくこれらの体験をとおして、自分に向けられたこの種の接近があることに、驚きの眼を見開かされたことだけは、ヤスオにとって、かけがえなく貴重であり、彼の魂に深いカゲを宿すことになったものと思われる。それはいうなれば、フランクルも指摘する、至高の体験をもちえたときの、態度価値の存在のアカシといってもよいのではないだろうか。

たしかに、人の心に勝手に土足で、その奥底までふみこもうとすること——それは相手にとって何よりの脅威であるかもしれないし、またそれだけに一そうかたくなになって私たちとの魂の通路をとぎすことになるのかもしれない。しかし、あえて——あえてという。こうしたユサぶりかけこそが、彼らに今の時点では本当に必要なんだという視点——ただ、コロニーにいる、施設にいる、日々の生活は充足されている、表面的にはきわめて恵まれた形での社会保障の恩恵をうけている、しかし、それが終局ではない、それをつき破っていくものが本当に必要なのだという、そういった視点を強調すること、本稿での意図はまさしくここに存するのである。

盲目と、そしてそれに加えての精神薄弱と。私どもは、今ここでは、こうした本稿の意図からして、彼自身の既往歴を、また生活史の背景をつまびらかにしようとの構えはもたない。しかしともかく、彼がこの二重の障害の故に、重複障害者の誰しもが運命づけられた、よりきびしい苦しみと悩みとに耐えぬきながら、彼をとりかこむ家族とのかかわりの中で、また、こうした施設における社会的対人関係の中で、ともすれば片よって形成されがちな性格の歪みにもとづく苦悩をもあわせもつことを私どもは十分知っている。それをふまえた上で、彼に対する接近の方策を私どもは改めて省察していかねばならない。人間における生の本質的・根源的意味を追い求めながら、態度価値の実現を志向しようとする、人間学的接近は、この種の極限状況の中でなおも、ひたすらに生きぬこうとする人のナマの生きざまに、視点をあてつ

つ、その自己実現の道を支えていくことを究極の目途とする。二重・三重の苦悩にもかかわらず、彼自身がその苦悩を避けることなく、彼自身の実存の重味をにないながら、生の意味を問いかけつつ苦闘していくとき、どのような障害をもとうとも、人間であるということ自体に伴う、人間存在の尊厳といった理念がふたたび高くかけられるし、こうした障害児教育の原点はそこにまた存在することを改めて考えさせられるのである。

この種の視点に立つとき、これら重複障害児に対する療育の施策も、その意味で盲教育、精神薄弱児教育の単なる亜流としてではなく、盲精神薄弱児者の全体としての人間存在、世界内存在としての根源的様態そのものに迫ろうとする基本的な構えに裏づけされるものでなければならぬ。彼らが苦悩の中で自らの実存を訴えつづけていくみちすじを、私たちがただ現象的・表面的に外側からとらえ、そのようなことしかできない存在として見定め、見すえてしまった迷妄はないだろうかとの反省が、こうしたとき、常につきまとわざるを得ない。これらの教育を、療育を、何か形式的に定式化していく中に、人間存在の根源的な意味と、その重味を見うしなってしまうことを強くおそれ、憂えるが故にである。

もちろんそれへのとりくみは、理論的にも方法的にも、私どもの中でまだまだ十分なものとはなっていない。私たち同様、独自の歴史的・一回性をにう、これら障害児ひとりびとりの内的世界に、いかに入りこみうるかについては、なお多くの検討さるべき点が残されている。あるひとりの盲精神薄弱者との出会い、さらに、私たちの志向する人間学的接近への深まりを志向しながら、本稿は、これまたあくまでも現時点での一つの試みにすぎない。次の段階には、このような形での接近の方式を、より理論化し、方法化するための歩みをふみ出すべくつとめなければならないと考える。（村上英治）

## 文 献

- 村上英治・陸山英順・加藤義男・沼尾孝平・伊藤紀子・赤塚大樹 1970 重度精神薄弱児への人間学的接近（序報）——かかわりの体験をとおして—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），17，1～19.  
 村上英治 1971 重度精神薄弱児への人間学的接近（第2報）——“私の内なる障害児”への志向—— 名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），18，1～15.

## A HUMANISTIC APPROACH TO THE SEVERELY MENTALLY RETARDED

—An Encounter with a Blind Mentally Retarded—

Eiji MURAKAMI and Kaori GOTO

We have been continuing the humanistic approach to the mentally retarded for these four years. The purpose of these researches is to understand the mode of life of the severely mentally retarded who is fated to live with the handicap by means of entering into their inner worlds and sharing experiences.

This paper is a concrete case report along to these orientations. The case is Yasuo who lives in Yōrakusō in the Aichi Prefectural Colony. He has no vivid contact with others in the institute and only keeps to speak to himself all day long. The immediate purpose of this research is to listen to his inner cry with all Kaori's heart and soul and to let Yasuo know the pleasure to have relations with other persons. By doing so, we can hope for Yasuo to have inner communication to others and to seek the self-actualization for himself.

During five days Kaori kept in contact with Yasuo. Step by step, Yasuo began to open his heart to Kaori and they could have some interaction mutually.

From this experience the following considerations are derived.

- 1) The so-called "human relation" is not of one-way regard, but is made of mutual regard and acceptance. The mode of their relation is but selected mutually for themselves.
- 2) A man grows and develops in the relationship with others. Accepting one's spontaneous and subjective behavior by others awakes the next step of his spontaneous and subjective behavior which is important as an implication in the outer world.
- 3) We are, for the time being, not sure whether the only five days experience has any significant meaning in Yasuo's inner life or not, but these mode of experience, we believe, is very important for accelerating his inner development.
- 4) The living condition in Yōrakusō may impose limit on the development of the severely mentally retarded due to various difficulties. Nevertheless we must consider to set up and maintain the best condition to guarantee their development.